
リンゴ太郎

竜崎太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リンゴ太郎

【Nコード】

N5515D

【作者名】

竜崎太郎

【あらすじ】

昔々、鬼達の王となった桃太郎から世界を救う為、新しい勇者が旅立つのでした。

第1話

昔々、世界の一部は鬼達によって支配されていました。

しかし桃太郎という名の少年によって、鬼達は倒されていきました。

そして遂に桃太郎とその仲間達は、鬼達の本拠地である鬼ヶ島の最下層へと辿り着きました。

鬼達のボス、ゴンザレスは言いました。

「お前が桃太郎か。ここまで来るとは驚いた」

桃太郎は返しました。

「貴様が鬼共の親玉だな。私が全てを終わらせてやる」

ゴンザレスはニヤリと笑いました。

「面白い、覚悟しろ！」

戦いはすぐに決着がつきました。

桃太郎も、その仲間である犬のウォルフ、猿のダンカン、キジのフイレバルドも強大な力を持っていました。

「参りました桃太郎様・・・」

ゴンザレスは土下座して、こう続けました。

「あなたの力があれば、世界を完全に手に入れられます！」

「何だと？」

桃太郎は、少し興味を持ちました。

「この島も、鬼達も、全てをあなたに差し上げます！どうか命だけはお助けを！」

「面白い・・・良からう、お前を生かしてやる。そしてこの島と鬼共を私のものとする」

こうして桃太郎は鬼達の王となり、世界は再び闇に包まれるのでし

た。

ゴンザレスは桃太郎の片腕となり、ウォルフは陸軍、ダンカン海軍、フィレバルドは空軍の長に任命されました。

誰も為す術が無く、世界は少しずつ桃太郎と鬼達によって支配されていきました。

一方・・・

ある所に、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

彼らはかつて、桃太郎を拾い、育てた人達でした。

桃太郎が旅立った後、彼らは神社で捨て子を拾い、育てました。

リンゴの木の近くに捨てられていた為、捨て子はリンゴ太郎と名付けられました。

数年後・・・

リンゴ太郎は、一人でもエロ本を買えるほどの立派な少年となっていました。

おじいさんとおばあさんは、魔王となった桃太郎を止めるべく、彼を育て鍛えてきました。

しかし彼は、全くやる気の無い少年でした。

「リンゴ太郎よ、桃太郎はいわばお前の義兄。どうかお前の手で改心させておくれ」

「嫌だ、面倒臭い」

「このままでは世界は奴によって支配されてしまうんじゃないよ」

「俺はずっと家にいたいんだよ！」

完全なるヒキコモリでした。

「なあリンゴ太郎、英雄になれば女にモテるぞ」

「ほー」

「しかも一生遊んで暮らせるかもしれないぞ！」

「仕方ない、どーせ暇だし行ってやるか！」

単純度MAXでした。

翌日・・・

「リンゴ太郎よ、達者でな」

「ああ・・・」

「ほら、これを持っておいき」

きびだんごです。

「ありがとよバアさん」

「リンゴ太郎・・・うっ」

「バアさん！」

「ぐー、ぐー」

眠っただけでした。

「コテコテじゃねえか！」

こうしてリンゴ太郎は、桃太郎を倒すべく旅に出たのでした。

「やれやれじいさんや、やっと旅立ってくれたね」

「うむ。これで食費も浮くし、お隣さんに息子が無職だなどと馬鹿にされんですむわい」

「さて、どこに行くかね」

ニート改めリンゴ太郎は、地図を広げました。

「サッパリわからん！」

そして破り捨てました。

「とにかく、まずは仲間だ！どうせなら強いのがほしいな」

こうしてリンゴ太郎は、ライオンを仲間にするべく草原へと向かいましました。

草原には、馬がいました。

「あー、退屈だなあ〜」

無気力全開でした。

「何か俺と似たよーなのがいるな・・・」

リングゴ太郎は、とりあえず話しかけてみました。

「おいお前」

「ん？何だお前」

「この辺に寂しがりライオンいないか？」

「ああ、寂しがりライオンなら去年吊り橋から落ちて死んだよ」

「そうか・・・」

「ああ」

「・・・」

「・・・」

「じゃあな」

「えっ」

リングゴ太郎は、次の仲間を求めて旅立ちました。

「って、待て待て」

「ん、どうした？」

さっきの馬でした。

「オイラを仲間にしようとは思」

「思わないね」

「・・・」

「・・・」

「何で」

「お前、俺と似てるじゃないか。役に立たなさそうだ」

「（こいつッ）」

「じゃ」

「ま、待てよ」

「何だよ」

「オイラを連れてけ！退屈で死にそうなんだ！仲間にしてくれたら、背中に乗せてやる！」

「何っ！？昔から乗ってみたかったんだ！よし行くぞ！」

こうして馬が仲間になりました。

「ちなみに名前はランディっていうんだ」

「良いから早く乗せろ！」

「・・・」

二人は、次の仲間を求めていました。

「どっかに女子高生落ちてないかな・・・」

「オイラはOLの方が好みだなあ」

どっちもカスでした。

「なあ」

リンゴ太郎は、言いました。

「お前の背中に乗るのも飽きてきた。そろそろ解散しないか」

「いやいやまだオイラ達出会って一日なんだけど！」

「わかったよ、じゃあお前も俺の家に住め。帰るぞ」

「えええっ」

こうして二人は、リンゴ太郎の家へと戻りました。

「ただいまー」

しかしそこには、傷だらけのおじいさんが・・・

「ジイさん！」

「リンゴ太郎か・・・やられたよ、鬼じゃ」

「何っ！？」

「ばあさんは殺された・・・リンゴ太郎、頼む。心を失った桃太郎を止めてくれ・・・」

「ジイさん、ジイさん！」

おじいさんは、もう動く事はありませんでした・・・

ランディは言いました。

「なあリンゴ太郎よ」

「気安く呼ぶな家畜め」

「!？」

「な、なあ」

「何だよ」

「こいつはさすがに、鬼共にリベンジ決めるしかないんじゃないか？」

「当たり前だ！行くぞランディ！」

「おう！」

「仲間なんかめんどくせえ！二人で突っ込むぜ！ぶおんぶおーん！」

「OK！ぶおんぶおーん！」

「鬼ヶ島つてどこだ！」

「わからん！」

完

第2話

リングゴ太郎達はひたすら走り続けていましたが、遂にランディは力尽きました。

「なあ」

「どうした家畜？」

「この物語は、完で終わったんじゃないのか・・・？」

「思ったより好評だったんで、一応まだ続けるそうさ。その辺は聞いちゃいかん大人の事情だよ君」

「そうか・・・所で」

「何だ？」

「お前はオイラに乗ってるだけ、オイラばっか走って不公平じゃないか！」

「それは主人公の特権とゆーヤツさ。その辺も聞いちゃいか」

次の瞬間には、リングゴ太郎は地面に伏していました。

「この馬・・・俺を落としやがったな・・・」

ランディは、ただブツサイクな顔で屁をこくのみでした。

リングゴ太郎に殺意が芽生えたのは、これで人生で七度目でした。ちなみに六度目は、プレステがバグった時でした。

「おーい！」

後ろから、おじいさんが追いかけて来ました。

人間と馬の喧嘩というレアな体験を目の当たりにしたおじいさんでしたが、全く気にも留めていません。

「言い忘れたんじゃないやがなリングゴ太郎」

「いや、ちよつと待てよ」

「ん？」

「ジイさん、あんた前回死んだんじゃない・・・？」

「まあ気にするな。それで、言い忘れたんじゃないやがな」

「いやいやいやいや気にするって!」

「わしらを襲った鬼共は、この先のビンビン村に巢食っておるそうじゃ」

「(人の話を聞けッ)ビンビン村?そりやまた随分と卑猥な名前の村だな」

「じゃ、後は頼んだぞリンゴ太郎」

おじいさんは、マツハラのスピードで引き返していきました。

「(早え・・・)全くシブトイじいさんだなリンゴ太郎!しかし無事で良かったじゃないか」

「喋るな家畜」

「!?!」

「なあランディ」

「ん、どうした?」

「何でお前は人間語を喋れるんだ」

「・・・その辺は聞いちゃいか」

次の瞬間には、ランディの眼球は潰されていました。

「アギヤー!!!!ちよっおまつそれはやりすぎだろ!」

「・・・ペッ」

しばらく歩くと、犬がいました。

「ワンワン!あなたは桃太郎さんですね!」

「何?」

「お腰につけたきびだんご、一つ私に下さいな!」

「俺は桃太郎じゃねええゝ!」

リンゴ太郎は、犬を一刀両断しました。

「いやいやお前さつきからバイオレンスすぎだろ!」

ランディのツッコミも虚しく、犬は倒れました。

リンゴ太郎は悲しみの涙を流し、叫びました。

「い、犬ゝ!!!!」

「いやいやお前がやったんだって・・・」

「リングゴ太郎、オイラはお前のキャラもテンションもつかめんよ」
「そうか」

「まさかオイラがツツコミ役だなんてな・・・」

しばらく歩くと、キジがいました。

「ケーン！あなたはリングゴ太郎さんですね！」
「何？」

「お腰につけたきびだんご、一つ私に下さいな！」

「ちょうど腹が減っていたんだ！」

リングゴ太郎は、キジを一刀両断しました。

「いやいやお前！人の・・・いやキジの話を聞いてやれ！」

火を起こし、器用にキジを焼きながらリングゴ太郎は言いました。

「お前は食わんのか？」

「・・・」

二人で美味しくいただきました。

「リングゴ太郎、腹が減ってるなら、何できびだんごを食わないんだ？」

「まあ色々あるんだよ。とりあえず俺は肉が好きなんだ」

「ほう・・・ハッ！」

リングゴ太郎の目は、明らかに食い物を見る目でした。

ランディは油断したら食われる・・・そう思いました。

しばらく歩くと、デモ猿がいました。

「ウキーツ！あなたはリングゴ太郎さんですね！」

「きびだんごが欲しいのか？ほら、くれてやるよ」

ランディは思いました。

「（おっ、猿にはちゃんと対応するのか・・・）」

「どうだ、うまいか？」

返事が無い。ただの屍のようだ。

「リンゴ太郎・・・お前・・・」

「このきびだんご、やはり腐っていたらしいな。食わないで良かった」

「（こいつッ）」

多分続く

第3話

結局仲間が増える事無く、二人はビンビン村に辿り着きました。

「何だ、普通の村じゃないか」

リンゴ太郎は言いました。

「もっとこー俺をビンビンにさせてくれるよーなアトラクションを期待してたんだが」

「オイラは村人達が全員ビンビン男な、ムサイ村を予想してたぜ」
やはりどっちもカスでした。

「助けて下さい！」

向こうから、女性が走って来ました。

「どう見てもただのニートな俺にいきなり助けを求めるとは・・・
罠だな！」

リンゴ太郎は女性を一刀両断しようとしたが、ランディが止めました。

「お前は人間不信すぎだ・・・まず話を聞こうぜ」
人間より馬の方がマトモとは、腐った男です。

「この村の男達は全て追い出され、今ここには女しかないんです」

「良い村じゃないかつ！よし任せろ、この俺様がすぐに助けてやる
！どこだレイプ犯は！」

「話聞けよ・・・」

そう言うランディのアソコもビンビンでした。

「（でけえ！）」

「女達は鬼の棲み家に呼ばれて、毎日あんな事やこんな事をさせられています・・・」

「そっそれはつまり（ピー）を（ピー）したり、（ピー）な（ピー）を（ピー）で」

「いえ、家事をさせられたり肩を揉まされたりです・・・」

「（こいつッ）」

「とにかく助けて下さい！私達は鬼が怖くて、何の反抗もできないんです！」

「俺に無断でハーレムを作るとは許せん！行くぞ家畜」

「（こいつッ）おう変態」

第4話

ビンビン村の奥、ビンビン山の小屋では鬼達が酒宴中でした。
そこに、火が放たれました。

「何だ何だ」

そして扉が蹴破られ、馬糞が沢山飛んできました。

「出て来いやああー!」

「おえっ! な、何事だ」

鬼達は慌てて小屋から出て来た瞬間、リンゴ太郎に一刀両断されて
いきました。

「これが兵法というものさ」

両手を馬糞でグチュグチュにしながら、リンゴ太郎は言いました。

「貴様・・・よくもやってくれたな」

残った鬼達は、まだ五匹もいました。

「おいリンゴ太郎、もうウンコ出ねえ・・・それに踏ん張り過ぎて
疲れた」

ランディはダウンしました。

「・・・俺、ピンチ?」

「死ね小僧!」

とりあえず、リンゴ太郎は村に逃げ帰りました。

そこで、一人の女性とぶつかりました。

「キャッ」

「あっ」

少し沈黙した後、リンゴ太郎は言いました。

「すいません、うつかりしてて・・・大丈夫ですか?」

「ええ、こちらこそ」

顔を上げた女性は、とても美しく・・・

「ヴおえっ」

そんな都合良くはいきませんでした。

「バアさん！」

「リングゴ太郎！」

何と死んだはずのおばあさんとの再会でした。

「何だバアさん、生きてたのか」

「きつとおじいさんは、私を死んだ事にした方がお前が頑張ると思
ったんじやろう」

「（でもバアさんが無事で良かったよ！）あのジジイ殺す」
本音と建前が逆になっていました。

「そうだバアさん、俺は鬼達から逃げてきたんだ。何か奴らの弱点
知らないか？」

「知らん」

「うーむどうするかな・・・バアさんも一緒に考えてくれ」
「嫌じゃ」

リングゴ太郎に、人生で八度目の殺意が芽生えました。

「うつだらー死ねや小僧オオWRYYYYY！」

やたらハイテンションな鬼が追い付いて来ました。

「くっ、来るなー！」

リングゴ太郎は刀をおばあさんに向けました。

「近付くとこのババア殺すぞ！」

「むうつ困った！」

やはり鬼もアホでした。

「ならば・・・こっちは馬を殺すぞ！」

後から来た鬼は、ランディを捕まえていました。

「すまんリングゴ太郎・・・エロ本くれるって言うから仕方無く捕ま

「つたんだ」

「いやソレ全然反省してないだろ！」

「さあ、どうする？」

「そんな馬いらん。馬刺しはスーパーでも買える」

「（オイラの価値って一体・・・ってか馬刺しにする気だったのかッ）」

「では殺そう」

鬼はランディをどつき回しました。

「ランディのことが　　！」

「????」

鬼達も意味不明状態に陥っている間に、何故かリンゴ太郎は覚醒ブレイクしました。

そして鬼達を四匹、一刀両断しました。

リンゴ太郎は残った鬼に刀を向けました。

「ま、待ってくれ！オラはアンタと戦う気は無い！」

鬼は言いました。

「オラはガンツ！アンタと同じ捨て子で、こいつらに拾われてイヤ悪事を働かされていたんだ」

ちなみにリンゴ太郎が捨て子だった事は、おばあさんから聞いたそうです。

「こいつらを倒してくれてありがとう！そして強いアンタを尊敬してるんだ！どうかオラを仲間にしてたもれ」

「（たもれ！？）ああ良いぜ、ただ飯はワリカンな」

「やった！」

こうして鬼の子ガンツが仲間になりました。

「やれやれ、また男の仲間か・・・しかも食えねえ」

「リンゴ太郎・・・すまん、助かったよ」

ランディが言いました。

「良いつてことよ」

リンゴ太郎はポンと頭をなでました。

ランディの頭は自らの糞だらけになりました。

「（こいつッ）」

第5話

鬼達を倒した一行は、村中の女を集めて酒宴を開いていました。

「おらー！もつと酒持つて来んかーい！」

「おいおいリンゴ太郎よ、飲みすぎだつて・・・」

「おらー！馬刺しはまだか馬刺しはー！」

「（それはオイラに対するイヤミなのか・・・？）」

ランディとガンツは、眠ったリンゴ太郎を引き連れて村を出ます。

「皆さん迷惑をかけました！リンゴ太郎さんもきつととても感謝してます」

「酒はまだかー・・・ぐがー・・・」

「じゃあオイラ達はそろそろ行くよ。リンゴ太郎もきつと別れを惜しんでるよ」

「馬刺しー・・・ぐおー・・・」

「（こいつッ）」

こうしておばあさんはおじいさんの下へと帰り、村の男達は村に戻つて来ました。

村の女達は、去って行った三人の話で盛り上がります。

「やれやれやつと行つてくれたわねアイツら」

「あの鬼ブツサイクだったわねえ！」

「あの馬なんかオナラ臭かったわよ」

「あの男の人なんか、すごい舌技もってるのよ！」

「あんだ、あいつと何したのよ・・・」

男三人、むさ苦しい旅の再開です。

「さて、どこに行くんだリンゴ太郎？」

「俺は馬刺しが食いたい」

しつこさMAXでした。

数日後・・・

彼らはあれから、いくつもの村を回り、鬼達を倒していました。そして皆、確実にスキルアップしていくのでした。

「俺の新技を見せてやる！これが手の甲を向けて乳を揉める、『逆手揉み』だッ」

「あああつこのじれったさが・・・きつ気持ち良い・・・！ぐふっ」

もはや変態でした。

「オイラの腕時計には仕掛けがあるのさ！ここをカチカチと4回引くとな・・・」

「何だ？・・・うつ！」

餅が出てきて、相手のノドにつまらせるのでした。

「オラも必殺技を使うぞ！『メテオプラズマ』！」

「ぐあああーっ！」

ランディは思いました。

「（アイツだけマトモな技じゃないか・・・）」

「中々やるなあアイツ、さすが俺の弟子だ。しかし俺のよーに実戦向きの技じゃないとな」

リング太郎は己の技術の方がよほど自信があるようでした。

「（何の実戦に使う技なんだ・・・）」

「強くなつたな、デンデ」

「（誰だよ）いつかリング太郎さんより、強くなってみせます！」

そう言うガンツが既に自分より強いとわかるリング太郎は、息子に腕相撲で負けた時に「俺が本気を出したら、お前の腕が折れるからな！」と強がる父親のような気持ちでした。

名前を呼ばれなかったランディは、「ボケ役ばかり目立ちやがって！ネタを考えてるのは俺なのに」と嘆く芸人のツッコミ役のような気持ちでした。

調子に乗った彼らは、遂に桃太郎の直属の配下達に戦いを挑む事を決意するのです。

「俺はまたキジ肉を食いたい！空軍をブツ潰しに行くぞ！」
どうやらランディは馬刺しにされずに済んだようです。

一行はキジのフィレバルド率いる空軍へと突入していきました。

「行くぜお前ら！ぶおんぶおーん！」

「（これ何の掛け声なんだろう？）ぶおんぶおーん！」

「で、空軍基地はドコにあるんだ？」

「わからん！」

やはりカスばかりでした。

第6話

一行は遂に、空軍基地へと乗り込みました。

「俺の手　コを見る！俺のチン　を見る！」

リンゴ太郎は半裸（露出部分は下半身）で突入しました。

「ぐわーっ、敵わん！」

空軍の鬼達は皆、短小包莖ついでに童貞の為、手も足も　ンコも出ませんでした。

「ってか全然空軍っぽくないよな・・・みんな地上にいるし」

「あつ、あれを見て下さい！」

頭上には戦闘機の影のようなものが沢山ありました。

「よっ、避けるーっ！」

ビチャビチャビチャ・・・見事に三人はカラスの糞だらけになりました。

「下ネタしか無いのかーっ！」

そして彼らは遂に、ファイレバルドの下へと辿り着きます。

「よく来たな愚かな人間共」

人間はリンゴ太郎 only でした。

「ぶっ。目が腐ってるのかね君は？それとも頭の方か？」

「（おのれ・・・）」

「私の名ファイレバルドはfirebardの意！」

ファイレバルドは炎の力を解放しました。

「食らえ！『朱雀炎舞』！」

「くっ、すごい炎だ！」

「オイラに任せろ！」

ランディが前に出ました。

「オイラの名ランディはLandの意！」

「おおランディ、地の力を解放するのか！」

「食らえ！『玄武ハリケーン』！」

全く名前に関係無い技でした。

しかしランディが後ろ足で起こした砂嵐は、炎を見事に消しました。

「何っ！？」

「おらー！焼き鳥にしてくれるわー！」

しかし既に、フィレバルドの体は炎に包まれていました。

「これが本当の焼き鳥か・・・美味そうだ」

やはりリンゴ太郎の発想は、一般人の臨界点を軽く突破していました。

「ランディのことが　！」

リンゴ太郎は覚醒フレイクしました。

「（毎回オイラの名前呼ばれるの・・・？）」「」

「死ぬ人間！『ゴッドバード』！」

「ピピッツ！反則、反則だー！」

リンゴ太郎はすかさず止めに入りました。

「ポケモンの技を使っちゃイカンよ君・・・著作権侵害だよ」

「しまった！」

やはりボスキャラもアホでした。

「しっしかしそもそも作者がそんなものの気にせずに使ってるじゃないか！」

「問答無用！地獄がお前を呼んでるぜ！」

「（何だあの決め台詞・・・）」「」

「おのれ人間共め・・・！桃太郎様、どうかこやつらを皆殺しに！」

人間はリンゴ太郎 only ですが、フィレバルドは一刀両断されました。

「甘いぜ・・・ギャグものに強さなんてほとんど関係無いのさ」

「そして物覚え悪いぜ！これにて一件落着！」

何故かランデイが締めました。

そして出番の無いガンツは、隅でイジけていました。

「（オラの存在意義って何だ・・・）」

第7話

空軍を壊滅させたリングゴ太郎達。今度は海軍を潰そうと企みます。

「このナレーション何気に口悪いよな」

「コラコラそうやって裏方を語り始めたら終わりだぞ」

「あの、第2話から裏方語ってますよ」

相変わらずカスばかりでした。

「（やっぱ口悪い）」

空軍基地を占拠した一行は、飛空艇に乗り込みます。

「最初に空軍を潰したのは正解だったな」

「しかしありがたみが無いなあ、こんなに早く飛空艇なんて」

とりあえず、人と馬と鬼の乗る飛空艇とは不気味な光景でした。

「いつけービュンビュン丸！」

「それ飛空艇の名前！？ダサッ！」

リングゴ太郎は昔の事を思い出していました。

「飛ばせ」と叫んだら、車のスピードが上がった事がありました。

あの時リングゴ太郎は「車が俺の言う事聞いた」と思い込んでいたが、実際はおじいさんが黙ってアクセルを踏んでいたのです。

「（ジイさん・・・）」

今思えばこの時のおじいさんの優しさから、彼の性格はワガママになっちゃったのです。

「どーでもいーけどこの回想ストーリーに関係無いよな！」

そうこれはただの作者の少年時代の実話です。

ビュンビュン丸は海軍のアジト、猿海へと辿り着きました。

「この飛空艇の名前それで確定なんだ！」

「猿海か・・・某映画と間違えやすい名前の海だな」

「とりあえず、どうやって海軍基地に行くんです？ここは岸、基地は沖ですよ」

「説明口調ご苦労。船を調達するぞ」

「おいおまいら」

「（２ちゃんねらー！？）」

そこに、海賊風の男が現れました。

「俺の名は海賊王ゴールド・」

「ロジャーか！？」

「ゴールド・タマタマだ」

「下ネタしか無いのかーっ！」

「で、その海賊王がここで何してるんだ？」

「黄昏てた」

「で、俺達に何の用だ？」

「暇だったから声をかけてみた」

リング太郎はゴールド・タマタマを一刀両断しました。

「よしコイツの船に乗り込め！」

そして基地へと突入しました。

「ダンカン隊長！何か変な奴らが突っ込んで来ます！」

「何い？」

海軍の長、猿のダンカンです。

「この猿山は俺のものじゃあーっ！」

対するは、猿並の馬鹿・リング太郎達です。

「馬鹿共め！食らえ！」

ダンカンは津波を引き起こし、ゴールド・タマタマの船にぶつけま

した。

「うおっ！」

三人はバランスを崩し、海に落ちました。

「ウキーツ！とどめを刺してくれるわ！」

ダンカンが海に飛び込みました。

「馬鹿め！」

船にしがみ付いていたリングゴ太郎達は、一気に船の上に上がりました。

「何っ！？」

そしてガンツのメテオプラズマによって、水中のダンカンは感電死しました。

「うぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃ……ぎゃはははっおならプー」

「何だ最後の言葉は……？」

「よく覚えときなランディ、奴の最後の言葉は、おならプーだぜ」

「だから何なんだそれは……」

「下ネタしか無いんですか！」

「とにかく、これが兵法ってヤツさ。ハイホーハイホー」

「（ウザッ）しかしやるなあリングゴ太郎」

残りの鬼共はアッサリ倒し、一行は陸へと戻りました。

第8話

「空軍も海軍もブツ潰して、俺らもうメチャ強いよな」

三人は陸軍を無視して、鬼ヶ島に向かおうと決意しました。

「ってコラ、ちよつと待たんかい」

そこに陸軍長、犬のウオルフが現れました。

「貴様は可愛い我が息子を殺した・・・許せぬ」

「ん？あーお前、いつか俺が一刀両断した犬の親か！」

「（うわー何かすっげーどーでもいいー伏線出てきたな・・・）」

ウオルフは遠吠えしました。するとどこからか仲間が現れました。

「行け！炎帝、雷皇、水君」

「（またポケモンネタ・・・）」

「ここは俺に任せろ」

リング太郎は単身、炎帝の前に向かいました。

そして水君を挑発しました。

「お前のチンチン短小包茎！」

「（何だあの挑発・・・）」

怒った水君は水を発射し、リング太郎はそれを避けました。

水は炎帝に当たり、炎帝は倒れました。

そして今度は水君の前に向かい、雷皇を挑発しました。

「お前のチンチン何かイボイボができてる！」

「（チンコネタしか無いのか・・・）」

怒った雷皇は雷を発し、リング太郎はそれを避けました。

雷は水君に当たり、水君は倒れました。

「おいランディ、いつもの頼むぜ」

「え？いつものって何だ？まっまさかアレをこんな所でやれっのか！？」

「ちっ違う、あんな過激なコトここのできるかつ！」

どうやら彼らには人に見せれぬ秘密があるようです。

「砂嵐だよ家畜！」

「（家畜からレベルアップしてる・・・）」

ピュアなハートを傷付けられたランディは、砂嵐をいつもより余計に起こしました。

雷皇の雷の威力が半減しました。

そしてリンゴ太郎は戸惑う雷皇を一刀両断しました。

「今日の俺カツコ良すぎイイッ」

「なかなかやるな、小僧」

遂にウォルフが前に出ました。

「てめえ、ウォルフってパソコンで打ちにくいんだよっ！」

訳のわからない怒りでした。

「我が名ウォルフはwolfの意！そして狼とは大神の意！『神風』を食らえ！」

「おいおいそれはちよつと無理があるだろ」

次の瞬間には、三人の体は血まみれになっていました。

「やつと馬刺しが食える！」

リンゴ太郎はランディに飛び付きました。

「ちよつ今はそれどころじゃないだろ！」

「大丈夫だ、このバトルにはな・・・必勝法があるんだ」

気分は秋山深一でした。

「うおおおゝ・・・！」

リング太郎は再び単身、突撃しました。

「お手っ！」

そして反射的に手を出してしまったウオルフは一刀両断されました。

「アホしかいないのかゝっ！？」

「どーでもいいーけど、ウオルフとフィレバルドの名前には一応意味があつたんだな」

「ダンカンには意味は無いらしいな」

「まー適当な捨てキャラだったんだろうな」

死んだ後も哀れな猿でした。

遂に全てのボスを倒した一行。

残るは桃太郎と、参謀ゴンザレスのみです。

そして今回も全く出番が無かったガンツは、一人イジけていました。

「（オラの存在意義って・・・）」

第9話

リング太郎は右手に違和感を覚えました。

「ん？・・・あゝっ！」

何と刀が折れていました。

「俺の愛剣『リング刀』が！」

「（ダサッ）」

「無駄に一刀両断しまくってたしな・・・」

「チクショー、この刀はリングの芯を固めて作られた名刀だったんだぞ」

「お前そんなもので戦ってたの!？」

「まあ良い、そこらへんで普通の刀を買って行こう」

「むしろそっちの方が強いだろ・・・」

一行は遂に鬼ヶ島へと向かいます。

途中間違えて巖流島に行ってしまう、剣豪・宮本武蔵の刀を盗みました。

武蔵はその為、權で小次郎と戦ったそうです。

そして鬼ヶ島へと到着しました。

「遂に来たな、ランディ・・・」

「ああ。長かったなリング太郎」

存在を完全に無視されているガンツは、ただイジけるのみでした。

「（オラの存在意義って・・・）」

リング太郎は扉を開きました。

「敵は本能寺にあり！」

そしてこう叫んで、突入しました。
「1回言ってみたかったんだ！」

ガンツは覚醒しました。

「オラの子 コを見る！オラのチン を見るおゝ！」

リング太郎とランディは、他人のフリをしていました。

「（オラの存在意義って・・・）」

「今度こそボスを見殺しして進むぞ。一気に最下層まで行くんだ」
「OK！」

しかし目の前にゴンザレスが立ちはだかりました。

「ボスが奥にいるとは限らんど？ガキ共」

「あ・・・兄貴！」

ガンツは叫びました。

「（うわーまたどーでもいー伏線が出てきた・・・）」

「裏切り者の弟など要らん、死ね！」

ガンツはアッサリ殺されました。

彼の脳裏には、最後にこんな台詞が浮かんでいました。

「（オラの存在意義って・・・）」

怒ったリング太郎は^{ブレイク}覚醒しました。

「ランディのことか ！」

「（何故オイラ・・・）」

そして一目散に外に逃げ出しました。

「待てガキ！」

それを追ったゴンザレスも、外に出ました。

リング太郎は華麗にクイックターンして、扉を閉めて鍵をしました。

「さて行こうか」

「おいおい、外に出して大丈夫なのか？」

「外には拉致ってきた宮本武蔵がいる。何とかなるさ」

その後ゴンザレスは武蔵に倒され、武蔵は小次郎との戦いに遅れたそうです。

第10話

二人は遂に、桃太郎の下へと辿り着きました。

「最終回の予感・・・！」

「ガンツ、ジイさん、バアさん、ランディ、仇を討ってやるからな」

「オイラはココニイルヨ・・・」

「よく来たな」

王座に座る桃太郎の瞳は、妖しく光っていました。

「お前が人間の誇りを捨てたクソ野郎か」

「フン、貴様に何がわかる・・・」

桃太郎は立ち上がり、語り始めました。

「初めは私も世界を救うつもりだった」

リングゴ太郎は鼻糞をほじり始めました。

「各地で鬼達を倒した私は、いつか勇者と称えられるようになった」

リングゴ太郎はでっかい鼻糞をほじり出して、気分が良さそうでした。

「だが愚民共の態度は変わった。私が鬼を倒す事を当然の事と意識し始めたのだ」

リングゴ太郎は尻をかき始めました。

「どこの村に行っても、愚民共は早く鬼を倒せと私を急かすばかり」

リングゴ太郎は尻のかきすぎで、尻を痛めてしまいました。

「休む暇も無い。鬼を倒せば次の鬼が現れ、愚民共はまた私を急か

す」

リンゴ太郎はそろそろ真面目に話を聞き始めました。

「私は思った。この愚民共の為に、私は世界を救おうとしているのかと」

ランディは話の始まった所から眠っていました。

「そしてゴンザレスに説得され、決めた。私が世界を支配し、愚民共を調教するのだ」

「このSMヤロー！」

ランディは調教という言葉に反応し、目を覚ましました。

「神にでもなるつもりか？クソ野郎め」

リンゴ太郎は言いました。

「お前のやつてる事は、その『愚民共』よりも酷いぜ」

「そうだそうだ！」

桃太郎は少し顔を歪めました。

リンゴ太郎は続けます。

「世界を支配するなんてな・・・俺がやるに相応しい事なんだよっ！」

やはり何かが間違っていました。

桃太郎は再び語り始めます。

「一度金が底をついた事があった。私の仲間ウォルフは、己の息子を守る事になった・・・」

ランディは再び眠り始めます。

「ダンカンはマクドナルドでバイトする事になった・・・フィレバルドは焼き鳥ショーで稼ぐ事に・・・」

「おいおいお前もギャグキャラかよ・・・重い話はウォルフのだけじゃないか。しかもお前は稼いでない！」

「愚民共は、恩人である私達に、何の援助もしなかったのだ！」

桃太郎は刀を抜きました。

「しかも私は器量が良いからと、ゲイバーで働く事になったのだ！」

リンゴ太郎は、少し不憫に思いました。

「話はここまでだ。後は勝者のみが正義となり、語る事を許される」

桃太郎の瞳は紫色に光り、闇の力を解放しました。

「待てよ、俺の話はまだ済んでないぜ」

リンゴ太郎も刀を抜き、光の力を解放しました。

「俺の小話『半ケツ物語』を聞きやがれ！」

リンゴ太郎の体は輝き始めました。

「来いリンゴ太郎・・・」

中でもアソコの輝きは、他と比べ物にならない程でした。

「ストップ！」

ランディは目を覚まし、叫びました。

「全く下ネタしか無いのか」

屁をこきながら、言い放ちました。

「そして君たち話が長いから勝負は次回に持ち越した」

最終話

遂に最終回です。

暇人作者の自己満足も、これで幕を閉じます。

「俺の小話『半ケツ物語』を聞きやがれ！」

「いやそれ必要なの!？」

リンゴ太郎は桃太郎に突撃しました。

桃太郎はその攻撃を片手で受け止め、弾き返しました。

「やっぱコイツは格が違う!強すぎるぜ」

「いつものアホ攻撃でどーにかならないのか!？」

「破ッ!」

桃太郎は左手に闇の力を集め、放しました。

「ぐはっ!」

それは見事にリンゴ太郎に命中しました。

「・・・!リンゴ太郎、お前!」

ランディはある事に気付きました。

「ヅラだったのか!」

リンゴ太郎は見事にハゲていました。

今の攻撃で落ちたヅラが、そこにはありません。

「バレたか・・・」

リンゴ太郎は言いました。

「何かとストレスの多い社会だ。こうなっちまった」

ランディは言いました。

「だ、大丈夫だ誰にも言わんから!」

リンゴ太郎は全ての力を解放しました。

「俺の頭を見た者は、誰だろうと許さん!」

リング太郎は大爆発^{ビッグバン}を引き起こしました。
ランディは気絶しました。

桃太郎はマントでそれを防ぎました。

しかし、頭から落ちたツラがそこにはありませんでした。

「お、お前も・・・！？」

「当然だ。貴様らは同じ者・・・私が作ったのだからな」

そこに、ハゲた悪魔が現れました。

「私は悪魔デスハザード。かつて悪魔を生み出し桃に詰めて送り、次はリングの木の下に捨てた」

衝撃の新事実でした。

「またくだらん伏線を・・・」

「ちなみにゴンザレスは私の部下だ。桃太郎、お前は見事闇の力を得たのだ」

桃太郎も、驚きを隠せない様子でした。

「さあ桃太郎よ、闇の力を得なかったその出来損ないを、早く殺すのだ」

「ふざけるな！」

桃太郎は言い放ちました。

「私は悪魔の良い様に操られていたのか・・・畜生！」

「なあ桃太郎」

リング太郎は言いました。

「お前の仲間達を殺した罪を、俺は一生をかけて償う」

「貴様、何を言っている？」

「お前はお前が殺した奴らに、一生をかけて償えよ」

「貴様・・・」

「協力してあのハゲを倒して、平和な世界を創ろうぜ」

ここは馬とハゲ三人がいるという、異様な光景でした。

「フン・・・悪魔の思惑通りとなるよりはマシか」

二人はデスハザードに切りかかりました。

「えっえっまさかそんなアホな！？・・・ぐはっ！」

こうして悪魔デスハザードは倒れました。

ランディは変な夢を見ているようでした。

「あああっ三本はキツイ！三本はキツイって！」

「いーかげん目覚ませバ家畜！」

「桃太郎、お前だって仲間を大事にする心を持つてる。ジイさんやバアさんだって大切だろ」

「・・・」

「二人とも鬼に傷付けられたんだ。そんなのはお前が望んでる事じゃないだろ」

「何だと・・・」

「世界征服なんか止めて、一緒に帰ろうぜ。二人ともお前の帰りを待ってる」

その頃おじいさんはパチンコに出かけ、おばあさんはワラ人形で桃太郎を殺そうとしていました。

「フン・・・私は、私の思う様にするだけだ。こんな世界、征服する価値はもう無い」

こうしてリンゴ太郎はまんまと英雄になり、桃太郎は家へと帰りました。

ランディは思いました。

「（最後まで適当なストーリーだったな・・・）」

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5515d/>

リンゴ太郎

2011年9月24日00時16分発行